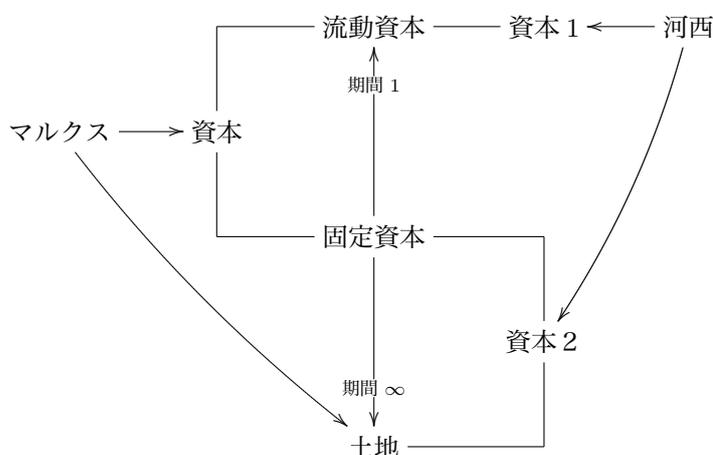


コメント：河西勝「企業の本質・形態・ガバナンス」*

小幡道昭†

2007年10月20日

1. 「資本二元論；企業＝循環資本＋固定資本」というのが報告の基礎だと理解する。このうち、「固定資本」は土地と同様に貸借関係で利用されるとみるべきだ、というのが基本的な主張であろう。償却期間を長期にとってゆき、永久に壊れない固定資本を考えれば、土地ないし土地合体資本（堤防など半永久的な設備に投下された資本）がでてくる。マルクス経済学では、固定資本は長短はともかく、償却という原理で、流動資本とともに、資本の投下対象として範疇化してきた。つまり、生産資本は流動資本と固定資本からなるという範式である。河西説は、固定資本を土地と同じ範疇に組み込んで、流動資本と概念的に切り離すべきだという主張であろう。



このような範疇の組み替えは、論理的には考えられる。資本2にあたる部分を、資本とよぶかどうか、等々議論は分かれるだろうが、この際この点は問うまい。用語法のズレはあまりに大きい。根本的な問題は、このような組み替えがなぜ必要か、それによって何が明らかになるのか、という点である。

評者が期待する効果は、株式資本の理論的解明である。これまでの原論が、(A) 出資・資本投下と (B) 貨幣の支出・回収で示される循環運動とを区別を明確にしてこなかった点は、流通論レベルにおける資本概念にまで遡って再考する必要がある。流動資本ないし河西氏のいう「循環資本」を資本概念のコアとして見なし、固定資本とりわけ土地合体資本（ひとたび投下したら償却というかたちでは永久に貨幣形態に戻らない）のような存在を明確に論じてこなかったことは反省しておく必要がある。株式資本の一つの意義は、この種の対象を資本主義的に処理する意味がある、という含意を河西氏の報告からよみとった。

*経済理論学会 55 回大会第 2 分科会報告

†東京大学経済学部

2. <資本＝「自己増殖する価値の運動体」は、マルクス主義的誤謬>というが、この点では河西氏の資本概念が不明確である。マルクスの機能資本家、貨幣資本家の分離論は、宇野弘蔵が批判したような意味で、理論的に想定すべきではない、という立場はとらなくてもよい。河西氏は、理論的にこの分離を想定しているのである。

この分離論を認めた、自己資本をもたない機能資本家に関して、自己増殖という概念は適用しようがないことはたしかである。問題は、自己資本という概念が、貨幣資本家の側について、考えられるかどうかである。貨幣資本家が貨幣を貸して、利子をとる、というのであれば、これは河西氏のいうように、用益の売買であり、資金という商品の価格として利子を得ているにすぎない。それは一方的な商品の販売であり、増殖という概念は適用できない。

貨幣資本家は、貨幣を貸すのではなく、出資をしていると想定すれば、出資元本が貨幣形態で回収されようとされまいと、ひとまず、出資した資本の自己増殖という概念は成りたつと考えられる。姿態変換するかどうかは、資本の価値増殖の基本的な契機と考えられてきた。これを必要条件から外せば、出資部分に関して、自己増殖という概念は成りたつはずである。河西氏の場合、「循環資本」にせよ、「固定資本」にせよ、資本概念が明示されていないので何ともいえない面があるが、評者にはけっきょく、貨幣資本家に相当する存在が、資本二元論の両元に出資しているように見える。この出資が、資本の自己増殖でない、ということが論理的にどのように示されるのか、がポイントだと考える。

3. 「純粋資本主義社会の長期的趨勢をイメージする」ということで、第1次世界大戦時までの歴史が示されている。固定資本にこだわるかぎり、この期が重要な意味をもつと考えることは、宇野弘蔵の帝国主義段階の重視と合致し、通説どおりである。たしかに、宇野の資本主義の純化・不純化論にとって、固定資本の巨大化は決定的であった。そして、このかぎり、原理論における固定資本の規定と、それに関連する株式資本の理論的処理を見なおすこと、あるいは河西氏流に「根本的に誤解」であると精算すること、も必要なかもしれない。

しかし、資本主義の歴史的な発展を振り返ってみると、はたして、固定資本の巨大化、という事態は、原理的に考えてみて、資本主義の運動を根本的に困難にするような要因なのか、今の時点からみると、再検討を求められる。資本主義は、固定資本がある範囲を超えるような産業構造を基軸にするようになると、機能不全をまねく、という命題は、理論的に論証できるかどうかは、固定資本処理の制限条項として、原理的な処理の範囲外に踏みだした要因とされてきた。

河西氏が「資本二元論」で示そうとされたポイントが、事実上、資本概念のコアに、株式資本を据えるところにあるとすれば、固定資本の巨大化を強調し、これを不純化につなげて論じてきた、従来の発展段階論の基盤そのものに、批判の目を差し向けてゆく必要がある。固定資本の規模が変化しても、変わらない範囲をあつかうのが原理論だといった通念から見なおすべきなのである。固定資本の規模といった、この種の変動因子が、全体の構造と運動にどのような変化をもたらしてゆくのかに焦点を当てた、変容論的な原理論が展望される。固定資本と純粋資本主義の関連に関して、本報告はけっきょく、かなり後ろ向きの議論をしているように思われる。